

令和七年十二月

交通安全子供作文集

小・中学校児童生徒の作文第四十八集



未来のために

一般社団法人

愛媛県交通安全協会

後援

愛媛県教育委員会

は し が き

愛媛県交通安全協会・県内十八の地区交通安全協会では、愛媛県教育委員会の後援により、小・中学生を対象に、毎年交通安全に関する作文を募集しています。この趣旨は、小・中学生の情操教育に資するとともに、交通安全についての関心を高め、子供の交通事故防止を図ることを目的に、昭和五十三年から実施しているもので、本年は小・中学校合わせて百二十八校から二千百五十六編という多数の応募がありました。

応募作品について、地元の地区交通安全協会の第一次審査を経た八十四編を、愛媛県交通安全協会の第二次審査で四十五編選定し、更に愛媛県教育委員会に第三次審査をお願いして厳正な審査の上、愛媛県交通安全協会入選作文として二十五編を選んできました。

作文は、子供たちが身近に体験したこと、家族や友達が交通事故の当事者になったことなど、広く交通安全の大切さについて素直に、かつ、切実に訴える内容となっております。

今回、入選作品二十五編を「交通安全子供作文集」第四十八集として発刊するに当たり、「愛」をシンボルマークとし、題名は、入選作品を代表して、八幡浜市立保内中学校二年生の松本名里さんの「未来のために」とさせていただきました。この作文集が家庭、学校及び職場において、一人でも多くの方に読まれ、交通安全への関心と認識をより一層高めていただければ望外の喜びです。

応募していただいた多くの小・中学生の皆様に感謝いたしますとともに、作文集発刊のためにご協力いただいた関係者の皆様に厚くお礼を申し上げます。県民の皆様には、今後とも交通安全協会の活動にご理解をいただき、一層のご支援とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

令和七年十二月

一般社団法人 愛媛県交通安全協会会長 宝 田 洋 造

愛媛県交通安全協会入選作文目次

「小学生の部」

おうだんほどうをわたるいみ	伊予市立郡中小学校	一年	池原 いけはら	奏翔 かなと	1
じてん車でお出かけ	今治市立近見小学校	二年	三宅 みやけ	悠大朗 ゆうたろう	2
ぼくの交通安全	内子町立石畳小学校	三年	山田 やまだ	彩仁 あやと	3
自分の命は、自分で守ろう！	伊予市立郡中小学校	四年	武智 たけち	結愛 ゆあ	4
かけがえのない命を守るために	西条市立徳田小学校	五年	佐伯 さいぎ	奈々美 ななみ	5
歩道橋	伊予市立中山小学校	五年	上岡 うえおか	美月 みづき	7
ヘルメットの大切さ	愛南町立城辺小学校	五年	尾崎 おざき	翔空 とあ	8
命を守るためにできること	西条市立大町小学校	六年	伊藤 いとう	愛華 まなか	9
交通安全！自分にできること	西条市立石根小学校	六年	黒川 くろかわ	直 すなお	10
大切な命	今治市立鳥生小学校	六年	吉田 よしだ	清玲 すみれ	12
交通事故のない安全な町に	鬼北町立近永小学校	六年	中村 なかむら	翠 みどり	13

「中学生の部」

予測できない危険から身を守るために	西条市立東予東中学校	一年	稗田 佑翔 ひえだ ゆうと	14
二つの観点からの交通事故防止	松山市立西中学校	一年	十川 咲菜 そがわ さな	15
毎日通る道を笑顔で	東温市重信中学校	一年	橋本 悠叶 はしもと ゆうと	17
ヘルメットをかぶっていても……	松前町立岡田中学校	一年	足立 穂華 あだち ほのか	18
事故の無い世の中へ	宇和島市立城北中学校	一年	高月 七々桜 たかつき ななお	19
命を守るための対策	愛媛大学教育学部附属中学校	二年	井上 咲愛 いのうえ えな	21
祖父の免許返納と理想の高齢化社会	松前町立岡田中学校	二年	安村 心希 やすむら ここの	22
「交通事故を防ぐために」	大洲市立肱川中学校	二年	安川 涼 やすかわ りよう	24
未来のために	八幡浜市立保内中学校	二年	松本 名里 まつもと めいり	25
「自転車と私の約束」	愛媛大学教育学部附属中学校	三年	小田 和佳 おだ わか	27
事故は突然やってくる	松山市立三津浜中学校	三年	小林 悠人 こばやし はると	28
事故を未然に防ぐために	久万高原町立久万中学校	三年	丸山 莉央 まるやま りお	30
ヘルメットの重要性	大洲市立大洲北中学校	三年	宇都宮 巧 うつのみや たくみ	31
大切な命を守るために	西予市立三瓶中学校	三年	井上 玄 いのうえ げん	33

愛媛県交通安全協会入選作文（二十五編）

【小学生の部】

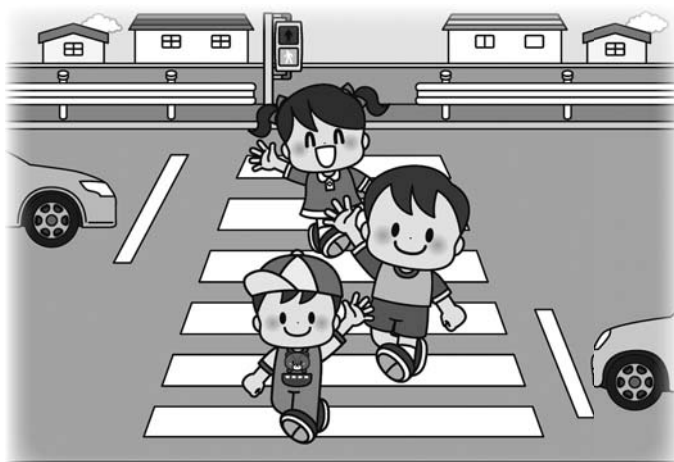
おうだんほどうをわたるいみ

伊予市立郡中小学校

一年 池原 奏翔

ぼくのいえのまえには、おおきなどうろがあります。くるまがたくさんとおっています。そのどうろを、ときどきおとなが、はしってわたっているのを見かけます。よこぎったほうがちかいから、いそいでいるから、といって、おおきいどうろをわたるのは、あぶないです。いえをはやめにでる、とおまわりでもおうだんほどうをわたるなど、ひとりひとりがじかんによゆうをもつてきちんとわたることがだいじだとおもいます。どうろのまんなかで、くるまのきれめをまつおじいさんも、みたことがあります。あぶなくて、だいじょうぶかなーと、しんぱいしました。きちんとどうろをわたることで、くるまをうんてんするひとたちも、ひやつとすることもへるし、じこをふせげるとおもいます。おうだんほどうをわたるほうも、ほこうしゃしんごうが、あおになったからといって、すぐにわたろうとせず、みぎひだりをみて、くるまがきていないか、とまってくれているかをかくにんして、おたがいがかきつけながらわたることがたいせつです。ぼくが、おかあさんとおうだんほどうをわたるときは、かたほうのてはおかあさんとしてをつなぎ、もうかたほうのてはあげて、とまってまっくれているくるまのために、すこしいそぎあしでわたります。そのときに「まっくれて

ありがとう。」のいみをこめてあたまをさげると、くるまのうんてんしゅさんもあたまをさげかえしてくれたりします。とまってくれることがあたりまえだとおもわずに、これからはありがとうのきもちをもって、あんぜんにきをつけたいです。



じてん車でお出かけ

今治市立近見小学校

二年 三宅 悠大朗

ぼくは、学校からいえにかえってからや、お休みの日にじてん車にのって近くの公園に行ったり、おかいものに行ったりします。

じてん車は、スピードも出るし、細い道もかんたんに行けるのであるくよりも早く行きたいところに行けます。ぼくは、じてん車にのるのが大好きです。

ぼくには、四さいのいもうとがいます。いもうともぼじよりんのついたじてん車にのれるのでいつしよにじてん車でおでかけします。でも、ぼくといもうとだけだとあぶないのでおでかけするときは、お母さんやお父さんとかならずいつしよに行くようにしています。じてん車にのるときには、お母さんが、

「じてん車にのるときには、ヘルメットをしっぴかりかぶろうね。」
といつも言ってくれます。

ぼくは、じてん車にのれるようになったとき、ヘルメットをかぶるのがイヤでした。おもたいしあついし、なんでヘルメットをかぶらないといけないのだろうと思っていました。お母さんに、かぶりたくないと言ったこともあります。そのときに、お母さんが、

「ヘルメットは、悠大ろうのあたまをまもってくれる大じなものだよ、いのちをまもってくれるよ。」

とおしえてくれました。お出かけのときもヘルメットをかぶっている大人もたくさん見ます。

ぼくは、あたまをまもるためにしっぴかりヘルメットをかぶっています。いもうとにも、ぼくがヘルメットをかぶせてあげます。じゅんびができたら出ばつです。近くの公園に行くときも、おかいものに行くときも車がたくさん通る道を通って行かないといけないので、車に気をつけてゆつくりはしります。道をわたるときは、おうだんほどうをわたります。右を見て、左を見て、もう一回右を見て車がきていないのを見てからわたります。

お父さんやお母さんから、

「車に気をつけて、じてん車をおしてわたるよ。」
とおしえてくれます。

ぼくは、二年生になったので、あたらしいじてん車を買ってもらいました。すぐかっこいいです。でも、そのじてん車にのるときのおやくそくもあります。ヘルメットをかならずかぶること、まわりをしっぴかり見てはしること、一人ではぜつたいにのらないことです。

このおやくそくをしっぴかりまもって、こうつうルールをもっとおべんきょうして楽しく大すきなじてん車にのりたいです。そして、いもうとにもおしえてあげたいです。

ぼくの交通安全

内子町立石畳小学校

三年 山田 彩仁

ぼくの住んでいるところは、交通じこのない、安全なところだと思います。山にかこまれた、しずかでいいところです。大きな道路はあまりありません。信号きもありません。車もあまり通らないので、あぶない目にあつたことはありません。

ぼくは登下校のとき、ちゃんと交通ルールをまもっています。横だん歩道をわたるときは、右左をよく見て、手を上げてわたっています。ちゃんとならんで歩いています。

でも、ちょっとかわつたルールがあります。それは、登校するとき、道路の右がわを歩きますが、下校するとき、道路の左がわを歩くというルールです。ぼくは一年生のときから毎日歩いています。このルールは、ずっと前から続いているそうです。それがあたり前だと思つていたけど、どうしてなのか考えていました。

交通安全教室のときも、道路の左がわを歩く練習をしました。そのとき、おまわりさんが、

「このあたりの道は、カーブがきついので、車から歩く人が見えないんだよ。だから、帰りは、左がわを歩いたほうが安全なんだよ。」と教えてくれました。下校のとき左がわを歩くというルールは、ぼくたちの安全をまもるためにあるんだということが分かりました。だから、ずっと前からこのルールがうけつがれてきているんだと思いました。

車が来るのがわかったら、早めに道のはしによけて、まつことができます。車を運でんする人も、ぼくたちに気がついて、スピードをおとしてくれます。だから安心で安全なとてもいいルールだと思います。だからぼくは、このルールをしっかりまもっていききたいと思っています。来年、弟が一年生になるので、ぼくがしっかり教えてあげたいです。

でも、しゅうだん登校のときに、ちょっとだけ、気をつけたらいいなと思うところがあります。おしゃべりにむちゅうになつて、白線から出て歩いていたりすることがありました。雨の日に、かさをさして歩いたとき、友だちとぶつかつてけんかになつたことがあります。よく考えると、これらのことも交通じこにつながるがあると思ひました。

いつも同じがわを歩くという地いきのルールだけで安心ではなく、自分たちが気をつけることもたいせつだと思ひます。いろんな交通ルールを知りたいと思ひました。

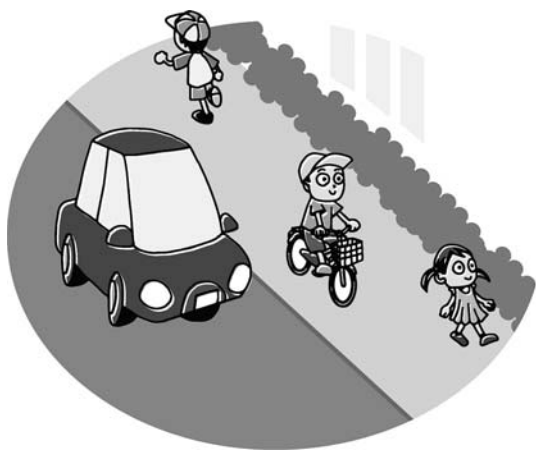
ぼくの住んでいるところでは横だん歩道で車はすぐとまつてくれます。あいさつをしたり、につこりわらつてくれたりします。車を運でんしている人はぼくのよく知つてる人や、顔見知りの人ばかりです。みんな思いやりの気持ちをもつてくれるんだと思ひました。みんなやさしいです。だからぼくは、家の近くでは、あぶない目にあつたことが、なかつたんだと思ひます。

でもほかのところでは、すごいスピードで走っている車を見たことがあります。道路が広くても、スピードの出しすぎはこわいです。

車を運でんする人におねがいがあります。いそいでいても安全運でんをしてください。自分がよく知っている人が道を歩いていると

そうぞうして、やさしい気持ちで運んでんしてください。そうすれば、じこのない平和な世界になると思います。

ぼくはこれからも交通ルールをまもっていききたいです。地いきのとかべつなルールだけじゃなく、ほかにもたくさんのかまりやルールがあると思います。これから交通ルールについて、しっかり学んでいきたいです。



自分の命は、自分で守ろう！

伊予市立郡中小学校

四年 武智 結愛

私は、最近新しい自転車を買ってもらいました。お気に入りのかわいい自転車で、前よりもスイスイこげるので、少し遠くまで行けるようになって、とてもうれしいです。うれしくていろんな所に行きたくなるけど、交通ルールを守らないとあぶないこともあると気づきました。

一つ目は、ヘルメットをかぶることです。理由は、もしも転んだときに頭を守るためです。あついけど、しっかりあごひもをしめてかぶります。

二つ目は、自転車に乗るときは必ず左がわを一人で走ることです。車やほかの人のためにわくにならないようにするためです。

三つ目は、おうだんほ道をわたるときは、自転車をおりて安全にわたることです。ほかの人のためにぶつからないように気をつけます。

四つ目は、自転車でもとび出しをしないことです。「右・左・右」をよく見て、安全にわたります。

とくに私が気をつけていることは、一つ目のヘルメットをかぶることです。前にテレビで事このニュースを見て、ヘルメットをかぶっていなかった人が大けがをしていました。ヘルメットをきちんとかぶっていたら軽いけがですんでいたかもしれないと思いました。だから、「カッコ悪い」とか「めんどくさい」と思っても、自分を大切にするために、ちゃんとかぶることが大事だと感じました。周りの友達

がヘルメットをかぶっていないなくても、みんなに流されずにしっかりかぶります。ヘルメットをかぶっていない友達がいたら、頭を守ることの大切さと、ヘルメットの役わりを教えてあげたいです。

私たちがくらす愛媛県は、よく事が多いと聞いたことがあります。調べてみると、今年に入って七月までに、人口十万人当たり交通事故でなくなった人が全国で一番多く、ほかの県とくらべても悪い結果でした。また、自転車に乗っていた人のなくなった数もふえていくそうです。この結果を見て、事ここは他人事ではなく、自分もまき込まれるかもしれないと思いました。そして、もしかしたら自分が人をきづつける立場になってしまうかもしれないと知りました。

最近では、ほうりつで自転車の交通ルールがもうけられました。車のように、自転車も大きな事につながるきけんがあるということだと思います。私にできることは、自転車に乗るときにはヘルメットをかぶって自分を守ること、交通ルールを守ることです。いつ事ここにあうかわからないから、自分の命は自分で守るという意識を持つことが必要だと思います。新しい自転車でのお出かけが、安全で楽しい思い出いっぱいになるように周りをよく見て、気をつけてすごしたいです。

かけがえのない命を守るために

西条市立徳田小学校

五年 佐伯 奈々美

交通事故のニュースを見て、母と姉が話をしていました。私も最近、交通事故にあっている人が多いと感じていました。母の、「この事故は、ヘルメットをしていたから助かったよね。」

と言う一言をきっかけに、家族で交通安全について話し合いをしました。

まず、家族が体験した交通事故の話を聞きました。

一つ目は、一番上の姉が中学生のときのことです。姉は、登校中に、通学路の標識がある道で車と接触する事故にあつたそうです。幸い、ヘルメットをかぶっていたので、軽傷ですんだとのことでした。私は姉の話を聞いて、

「姉が無事でよかった。」

と思いました。そして、ヘルメットはとても大切だと感じました。事故にあつたとき、姉がヘルメットをかぶっていなかったらと考えると、もっと大変な事故になっていたのではないかと考えました。私は、通学路でも気を付けないといけないと思いました。

二つ目は、もう一人の姉が中学生のときのことです。姉は、登校中に車を避けて二メートル下の川に落ちてしまったそうです。この時も、ヘルメットをしつかりとかぶっていたので、すり傷ですんだとのことでした。この時も、事故が起こった場所は通学路だったそうです。私たちが通学する時間帯は、通勤する車もたくさん通る時間帯です。

私は、ヘルメットをきちんとかぶることの大切さを改めて強く感じました。

家族との話し合いを通して、事故は身近なところにもたくさんあることが分かりました。私は、姉たちの体験から、自転車に乗るときにきちんとヘルメットをかぶることはもちろんですが、普段の登下校でも周りをきちんと確認して、安全に通学しようと思いました。

自転車に乗るときに、ヘルメットをかぶっているときとそうでないときでは、事故があつたときに大きなけがを負ってしまったり、命を落としてしまったりする危険性に、大きな違いがあります。

インターネットで調べてみると、警視庁の資料では、二〇二〇年から二〇二四年の間に自転車乗車中の交通事故で亡くなった人のうち、五十パーセントは頭のけがが原因だったそうです。

頭のけがが原因で亡くなったり、重傷を負ったりした人のうち、ヘルメットをかぶっていない人の割合は、かぶっている人の割合の約二倍近くになるそうです。また、二〇二四年の愛媛県のヘルメット着用率は約七十パーセントで、他の都道府県と比べると、着用率は高くなっています。

しかし、私は、ヘルメットをかぶっていない人がいるのはどうしてか気になりました。

そこで、なぜヘルメットをきちんとかぶらない人がいるのか調べてみました。すると、ヘルメットをきちんとかぶらない人が多い理由として、二つのことが分かりました。

一つ目は、自転車乗車中にヘルメットをかぶることは努力義務で、罰則などは設けられていないことです。罰則がないからという理由で、ヘルメットをかぶらない人が多いそうです。わたしは、法律で罰

則が設けられていなくても、ヘルメットをかぶることは、自分の命を守るためにはとても大切なことだと思っています。

二つ目は、脱いだヘルメットを運ぶことやヘルメットをかぶることが面倒だということです。確かに、運ぶことやかぶることが面倒で、かぶりたくないと思う人もいると思います。しかし、わたしは、かけがえのない命は何ものにも代えられないので、必ずヘルメットをかぶってほしいと思います。

このように、家族と話し合ったり、自転車乗車中の事故について調べたりすることを通して、事故につながる危険なことは、身近なところにも潜んでいることが分かりました。

私は、きちんとヘルメットをかぶって安全性を高めたり、周りをきちんと見て危険な場所がないかを確かめたりしたいと思います。そして、家族と話し合ったことや調べて分かったことをこれからの生活に生かして、かけがえのない命を守っていききたいです。



歩道橋

伊予市立中山小学校

五年 上岡 美月

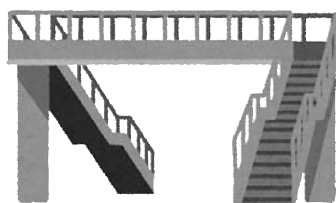
私の住んでいる中山町には、町の中心の道路に交差点があります。そこには横断歩道があり、そのすぐ近くに歩道橋もあります。私たち中山小学校の児童は、この横断歩道は渡らずに、歩道橋を渡りましょう、というルールがあります。どうして横断歩道があるのに歩道橋があるんだろう。なぜ、小学生は歩道橋を使うようになったんだろう。先生から理由を聞くまでは、あまり深く考えてはいませんでした。

先生が話してくださったのは、今から何十年も昔の話でした。当時、小学六年生の男の子が横断歩道を渡っていたところ、交通事故にあっけしき、残念ながら亡くなってしまったという話でした。その事故があつてから、中山小学校の児童は、横断歩道を渡らずに歩道橋を渡りましょう、というルールができたそうです。

でも実は、私が最近できていないなと思うこともあります。それは、横断歩道を渡るときに大きく手を挙げることです。小さい頃は何か思いませんでした、今は少し恥ずかしいと感じることがあります。それでも、大きく手を挙げることにきちんと理由があります。大きく手を挙げることで、運転手さんに自分がいることを気付いてもらうためです。歩道橋を渡る理由と同じで、守るべき交通ルールには、きちんと理由があります。事故にあつて家族を亡くした方は、命が助かる方法があつたのではないかと、今でも悩み続けているのではな

いかと思います。一つしかない大切な命を守るために、私も交通ルールをしっかり守っていききたいです。

私は、横断歩道を渡ってはいけない理由を知ったこととお母さんの話を聞いたことはよかったなと思いました。もうこれ以上、悲しい事故が起こらないように、私も歩道橋を渡って、交通ルールを守ろうと思いました。



ヘルメットの大切さ

愛南町立城辺小学校

五年 尾崎 翔空

春休みに友達とサイクリングに行きました。公園に着いたら、野球をして遊びました。五時のチャイムが鳴ったので、友達と山道から帰ることにしました。その帰り道、下り坂でスピードを出し過ぎてしまい、カーブを曲がり切れず、自転車ごとみかん畑に落ちてしまいました。誰もいない場所で、痛くて動かせませんでした。だんだんと辺りがうす暗くなってきました。どうにかして誰かに気付いてもらおうと、力の限り声を出して助けを求めました。

「助けてください！助けてください！」

痛くて痛くてたまらなかったけど、必死に声を出し続けました。すると、

「おい、どこだ。」

と、おじさんが助けに来てくれました。その時、ぼくは安心しました。すると、おじさんが、

「君えらかったね。ヘルメットをかぶっとったけん頭打たんですんだね。よかったね。」

と言ってくれました。その後、病院に救急はん送されました。救急隊の人にも

「ヘルメットをかぶっていなかったら命がなかったよ。」

と言われました。ぼくは、ヘルメットをかぶっていて本当によかったと思いました。ぼくのけがは思ったよりもひどく、救急車で運ばれ

た病院では、

「どうにもできない。」

と言われました。すぐに他の病院にはん送されました。その時、救急車の中でも父さんに

「ヘルメットをかぶっとつてよかったね。」

と言われました。ヘルメットに命を救われたのだと思いました。複雑こつ折という大けがだったけど、ヘルメットのおかげで大切な命は無事でした。

「きん急手術をします。」

こんな大けがになつていとは思わなかったので、この言葉を聞いてなみだが出ました。夜十時からきん急手術をしました。しかし、なかなかうまくいかず、次の日も手術をしました。父さん、母さん、兄ちゃんが来て、はげましてくれたのを今でも忘れません。そして、入院中、母さんがずっとそばにいてくれたことに感謝しています。

四日後、無事に退院することができました。退院して一番に、助けに来てくれたおじさんにお礼を言いに行きました。ぼくにとっておじさんは命のおん人です。その時、おじさんにまた、

「ようヘルメットかぶっとったね。」

と言われました。おじさんは最後までヘルメットの大切さを教えてくれました。その言葉が温かくて、うれしかったです。

学校が始まってすぐに運動会練習が始まりました。しかし、ぼくは再こつ折のおそれがあるため、参加できませんでした。くやしくて仕方がありませんでした。それから、手術をして一か月後、無事にギブスを取ることができました。でも、その時病院の先生から、

「三か月後にもう一回手術をがんばろう。」

と言われて、ぼくは少し元気がなくなりました。それから毎日リハビリをして、うでをのばす練習をしました。

夏休みに入り、三回目の手術をしました。家族に、「これで終わりやけん、がんばれ。」

とはげまされ、入院しました。また全身ますいです。あの痛みを思い出すだけで不安で仕方ありませんでした。無事に三回目の手術も終わり、退院することができました。やっとやりたいことができると思うと、一安心でした。

ぼくは、あの時の事故を一生忘れません。ヘルメットは人の命を守る大切な役割があることを実感することができたからです。これからも、自転車に乗るときは必ずヘルメットをかぶり、交通ルールを守ります。ヘルメットの大切さを友達にも伝えていきます。友達には、あの痛み、あの思いを絶対に味わってほしくないからです。ぼくの大切な人達が、これからも笑顔で過ごせる毎日になるように、交通安全の大切さをもっと広めていきたいです。



命を守るためにできること

西条市立大町小学校
六年 伊藤 愛華

「たった数分のちがいで、命を失うかもしれない。」これは、小学校の先生が語った言葉だ。初めは大げさに言っているように聞こえたが、最近、自転車でもヒヤツとする体験をしたことで、その言葉の重みを実感するようになった。

ある日、友達との約束に間に合わなくなりそうになってしまい、急ぎ足で自転車をこいでいた。信号が赤色になりかけた交差点で、止まるか進むか一しゅん迷った。結局、止まる判断をしたのだが、その数秒後、すごいスピードで車が通過していった。

「もし、そのまま進んでいたら・・・。」

そう考えるだけで、こわくなる。交通ルールの大切さを体感したしゅん間だった。

交通事故は、だれにも起こりうる身近なきけんだ。令和の時代になっても、年間でたくさんの人が命を落としているという現実がある。その多くは、「ほんの少しの油断」や、「急ぎたい気持ち」が引き金となっている。だからこそ、ルールを守るだけでなく、相手の動きに注意を向ける「思いやりの運転」や、「きけんを予測する力」が必要だと思う。

学校でも「交通安全教室」があり、交通安全についての話やシミュレーション体験などがあるが、正直なところ、その日が過ぎると記おくや意識はうすれてしまう。だから、本当に大切なのは、日常の

中でどれだけ意識を持ち続けられるかだと思う。通学路での歩行者信号無視をする自転車、スマホを見ながら運転するドライバー……。それぞれが一つのリスクになり得る。

最近では、自転車の技術の進化や車の安全機能も向上している。しかし、技術にたよるだけでなく、人間の「判断」と「思いやり」があつてこそ真の安全は守られると思う。たとえ数分おくれたとしても、安全に行動することで、自分と相手の命を守ることができると思う。

交通安全は、特別なことではなく、「いつもの行動」に宿るもの。今日も、横断歩道の前で止まり、相手の目を見て、「大丈夫」と「ありがとう」の気持ちを交わせた。それだけで、社会は少しやさしくなったような気がした。

これからも「小さい行動」や「判断」、「思いやり」を大切にして、自分や相手の命を守る行動をたくさん積み重ねていきたい。そして、自分や相手の命を大切にしていきたい。



交通安全！自分にできること

西条市立石根小学校

六年 黒川 直

ぼくの家から学校までは遠い。でも、毎日友達と声を掛け合いながらがんばって登校している。家から学校までは、三キロメートルほどだ。

ぼくが学校に行くときには、横断歩道を渡る。その横断歩道は、車通りの多いところにあるけれど、信号機がない。だから、駐在さんや見守りボランティアの方が、毎日そこに立って、ぼくたちを渡してくれている。

ある日、登校班の友達と横断歩道を渡ろうとしていたときのことだ。駐在さんや見守りボランティアの方が、いつものように横断歩道の真ん中に立ち、ぼく達を渡してくれようとしていた。また、横断歩道の横では、車が止まってくれていた。そのとき、止まってくれている車を後ろから追い越してきた車がいた。本当に事故になりかけた。みんな無事でよかった。横断歩道でも、油断してはいけないと心の底から思った。

ぼくは、この事が起きてから、横断歩道を渡るときに絶対に気を付けようと思っていることが三つある。

一つ目は、駐在さんや見守りボランティアの方が車を止め、「渡っていいよ。」と、言ってくれたときでも、自分で左右を見てから渡ることだ。大人が車を止めてくれていても、追い越してくる車がいるかもしれない。自分で左右を必ず確認してから渡ることを登校班の

友達にも伝えたい。

二つ目は、車を運転している人に、横断歩道を渡っていると分かってももらえるように、大きく黄色い班長旗を振ることだ。特に、トラックの人には渡っているのが見えないときがあると思うので、大きく黄色い班長旗を振って、渡っていることを知らせるようにしている。

三つ目は、止まってくれた車に、「ありがとうございます。」とお礼を言うことだ。朝、急いでいるかもしれないけれど、ぼくたちが渡るときに止まってくれたので、きちんとお礼を言うことが大切だと思う。班長のぼくが、しっかりあいさつをして、下の学年の友達の見本になりたい。

六月には学校で、交通安全教室、交通安全キャンペーンがあつた。交通安全教室では、自分の自転車に乗り、障害物に当たらないようにハンドルを操作したり、急ブレーキをかける練習をしたりした。実際の道路でも、練習したことを生かしたいと思った。

交通安全キャンペーンとは、警察の方が道路通行中の車を止め、横の広場に誘導し、小学生のぼく達が、交通安全のお願いをするというものだ。ぼくたちは、運転手の方に、石根小学校で育てている篤山椿と、交通安全へのお願いの手紙を渡した。ぼくは渡すときに、少しでも交通事故がなくなるようにと思いながら、

「交通安全をお願いします。」

と言って渡した。運転手の方は笑顔で、

「ありがとう。」

と言って、受け取ってくれた。運転手の方をお願いしたから、自分は何もしなくていいわけじゃなく、ぼくも特に自転車の乗り方に気を付け、事故にあわないように心掛けたい。

この交通安全キャンペーンは、石根小学校で四十二年前から続けている伝統ある行事だと聞いた。この伝統ある交通安全キャンペーンに参加できてよかった。これから先も、ずっと長く交通安全キャンペーンが続いてほしい。ぼくの家族や周りの人にも交通安全を呼び掛け、自分自身も交通安全に十分気を付けて生活していきたいと思う。



大切な命

今治市立鳥生小学校

六年 吉田 清玲

テレビのニュースで目にする交通事故。自分には関係ないと思っていても、みなさんの身近に危険はひそんでいます。

私のひいおばあちゃんは交通事故で亡くなっています。その話を聞いた時、すごく悲しい気持ちになりました。そこで、おじいちゃんにくわしく話を聞きました。

私のひいおばあちゃんはおじいちゃんが三才の時に車のひき逃げ事故で、三十三才の若さで亡くなったそうです。おじいちゃんはおさかったので、ひいおばあちゃんとの思い出が少ないのは悲しいだろうなと思います。もしも事故にあわなければ、もっと長生きできて、おじいちゃんとも幸せに暮らせたのではないかと考えると、切ない気持ちになりました。

事故を起こした人はつかまっていけないと聞き、もっと悲しい気持ちになりました。おじいちゃんは、

「自分で罪をつぐなつてほしい。」

と、話していました。そして私が

「もしもお母さんに会えたら、どんな事を伝えたい？」

と、質問すると

「三人の孫にめぐまれて幸せだよ！」

と、話してくれました。お母さんが死んでしまつて悲しいはずなのに、お母さんに

「自分は今、とても幸せだから心配しないで！」

と、言えるおじいちゃんはずごくかっこいいなと思います。私なら

「お母さん、なんで死んじゃったの？」

と、言つてずっと泣いてしまうはずです。それは、おじいちゃんが優しくして強いから言えるのだと思います。私の自まんのおじいちゃんです。

おじいちゃんは、七十七才の時に運転免許証を返納しました。おじいちゃんから運転免許証の返納を迷っている高れい者へ伝えたい事は、自分は大丈夫だと思つていても、家族や周りの人から返納をすすめられたら、運転免許証を返納した方が安全で、自分は返納して良かったと思つているそうです。

事故を起こさないために大切な事は、なるべく時間と気持ちに余裕を持つて、横断歩道でもしっかりと安全を確認する事が必要だと教えてくれました。おじいちゃんには、ひいおばあちゃんの分まで長生きしてほしいなと思います。

防げる交通事故はたくさんあると思います。「相手が止まってくれから大丈夫」ではなくて「自分の命は自分で守る」自分が止まる事が大切だと思います。そして、この作文を読んでもくれた人が交通事故を防ごうと思つてくれることで、交通事故が一件でも減ることを願っています。

交通事故のない安全な町に

鬼北町立近永小学校

六年 中村 翠

私の住む町は、山が多く、水もきれいです。家の近くには、イノシシやシカ、野ウサギ、サルなどが現れる自然豊かな所です。都会と比べて自動車や自転車、歩行者の数はとても少ないですが、朝や夕方は仕事の行き帰りや登下校で交通量が多くなります。

私の家の近くには、友達がありません。遊びに行く時には、一番近くの友達の家でも自転車で行くしかありません。友達の家で遊んで、自転車で帰るころには夕方になり、昼間よりも交通量が増えます。私は、その横を自転車で通るので、いつもヒヤヒヤしながら走ります。これまでに、何回か自転車でこけて、軽いけがをしたことがあります。でも、きちんとヘルメットをかぶっていたので、大きなけがをしたことはありません。ヘルメットの大切さが分かっているのも、これからもあごひもを力チツと留めて、安全に自転車に乗りたいと思います。

私は事故にあったことはありませんが、いつも渡る横断歩道でこわい体験をしたことがあります。それは、夜の交通量が多い時に、その横断歩道で自動車と歩行者がぶつかるという事故を見たのです。歩行者はきちんと横断歩道を渡っていたのに、自動車にはねられたのです。その時、私は家族と買い物に行く途中でした。自動車がたくさん停まっていて、何事かなと思って見てみると、人が倒れていました。私の父は消防士なので、すぐにその人を助けに行き、近くの

消防署の人を呼び、倒れていた人を救急搬送しました。また、母は警察の人がまだ来ていなかったので、たくさん停まっていた自動車を安全に移動させていました。私がいつも渡っている横断歩道で事故が起き、もつと自動車に気を付けて渡らなければいけないと思うようになりました。その後、事故は起きていないので、安心していきます。気を付けていても交通事故にあうことがあります。交通事故にあわないように、私は、次のことに気を付けようと思います。

一つ目は、道路を横断する時は、必ず確認しながら渡ることです。歩行者が優先だからといって左右を見ずに渡ると、運転している人が気付いてない場合があるかもしれません。横断歩道を渡る時は手を挙げたり、左右を自分の目でしっかり確認したりしたいです。

二つ目は、信号をよく見て渡ることです。歩く時も自転車に乗る時も、きちんと止まって信号を確認したいです。

そのほかに、事故がなくなるように、ポスターなどで呼びかけることもよいと思います。町のみんなの目を引くようなメッセージ性の高いポスターがよいと思います。

私の住む町やみんなの住む所が、事故のない安全安心に過ごせる場所になってほしいと願っています。これからも交通ルールを守り、登下校も遊びに行く時も、安全に考えて行動していきたいです。

【中学生の部】

予測できない危険から身を守るために

西条市立東予東中学校

一年 稗田 佑翔

皆さんは、乗り物でヒヤッとした経験はありませんか。僕は先日、生まれて初めて命の危険を感じました。それまでは、交通安全の大切さは分かっていたても、どこか他人事のように思っていたのです。しかし、この出来事を通して、それがとても身近な問題であることだと考えるようになりました。

僕たちの中学校では、ほとんどの生徒が自転車通学をしています。僕も入学と同時に自転車での通学を始めました。自転車は速くて便利な乗り物です。重たいカバンを後ろに積んでも文句ひとつ言わず、僕がペダルを強くこげば、それに応えて一緒に走ってくれる、まるで相棒のような存在です。

入学から二か月ほどして、学校で交通安全教室が開かれました。実際の事故の事例を聞いたり、自転車の実技講習を行ったりして、安全に登下校するための注意点を学びました。僕も、「ルールを守り、正しく運転することが大切だ」と強く感じました。

しかし、日常に慣れてくると、その「当たり前」が崩れる瞬間がやってくる場合があります。毎日通学するうちに、運転に自信が付き、僕は次第に友達とおしゃべりをしたり、スピードを出したりするようになっていました。そんな油断をしていたある日、ヒヤッとする出来事が起き

たのです。

それは、部活動の帰り、夕方のことでした。空が暗くなりはじめ、僕は疲れた体で自転車をこいでいました。ヘルメットの間から垂れてくる汗をタオルで拭き、「晩ごはんは何やろう」などとぼんやり考えていたとき、見通しの悪い三差路にさしかかりました。いつもなら、僕は、カーブミラーを確認してから通るのですが、そのときは注意をおこたってしまいました。

突然、脇道からグレーの車が飛び出してきました。僕はあわててブレーキを握りしめ、ハンドルと一緒に心臓を握りつぶすような感じがしました。幸い、相手の車も急ブレーキをかけ、ぎりぎりですつからずに済みました。運転していたのは六十代くらいの男性で、まん丸な目で僕を見つめ、ガラスの向こうで「だいじょうぶ？」と口が動いているのが見えました。僕も小さくうなずき、互いに頭を下げた交差点を離れました。気付くと、汗を拭いていたタオルごとブレーキを握っていて、身の危険を感じて必死の行動を取ったことを実感すると同時に、冷や汗が止まりませんでした。

帰宅後、家族にこのことを話すと、もちろん大いに叱られました。そして、何がいけなかったのかという家族会議となりました。この話合いで、僕は、どれだけ疲れていても、急いでもいい、安全に対する意識を保つことが必要だと実感しました。今回は、自転車の運転に慣れてきていたことが、油断につながったと思います。家に着くまでが通学です。油断しないで、安全運転を心がけるべきでした。

そのあと、令和六年中の交通事故の件数を調べてみました。警視庁の発表によれば、全国で約三十万件もの事故が発生しています。とても多いと感じました。原因の多くは「人的要因」、つまり、今回の体験のような、判断ミスや注意不足によるもので、全体の八割以上にも上ります。事故

にはならなかったけれど、僕のように危ない経験をした人の数は、その何十倍にもなるのではないでしょうか。

ここから、もう一つの大変なことが見えてきました。それは、自分も含めて「人間の行動を信用しすぎてはいけない」ということです。車は来ていないだろう、相手が止まってくれるだろう、ミラーを確認したつもり……。そんな、小さい思い込みや不注意の積み重ねが、大きな事故を引き起こしてしまうのだと思います。

安全性を高めるために、自分でもできる備えがあります。ヘルメットの着用はもちろん、自転車の整備をしておくことです。規則を守ることや、日常点検の習慣は、予測外で危険な状態になったとき、身を守ってくれるものだと思います。また、失敗しない、いつも完璧な人はいないからこそ、規則を守る意識が大切なのだと思います。

これからは、安全に生活するために、面倒だとは思わず、普段からルールやマナーを守っていききたいです。規則は覚えるだけでなく、きちんと守ることで自分を守ってくれることを学びました。そして、これらのことを体験と共に、友人たちにも伝えていききたいと考えています。



二つの観点からの交通事故防止

松山市立西中学校

一年 十川 咲菜

今現在、愛媛県内では交通事故が非常に多く起こっています。そのため、七月七日から十六日まで、愛媛県に「交通死亡事故多発緊急事態宣言」が発令されていました。愛媛県では、今年に入ってから交通事故で三十一人が死亡しています。人口十万人当たりの死者数二、四三人は、全国ワースト一位です。全国平均〇、九六人と比較しても、愛媛県は突出した数値となっています。宣言を行ったにも関わらず、現在も交通事故は続いています。そこで、私なりに個人的な観点及び組織的な観点からの交通事故防止について考えてみたいと思います。

私が通学中の時のことです。狭い道を歩いていたとき、車が勢いよく曲がってきました。狭い道なので私は端に寄っていましたが、車は猛スピードで通り過ぎていきました。運転手は、「今急いでいるのに何でこんな所を子供がウロウロ歩いているんだ。」とでも言いたげな、不機嫌そうな顔をして。「狭いし、危ないから、気を使ってゆっくり走ってくればいいのに。」と思いました。その時、私はふと考えました。もし私があの車に気付いていなければ、どうなっていたのかと思うと、たった数秒間の出来事なのに、しばらくの間、心臓がドキドキして苦しかったことを覚えています。

私はピアノを習っているのですが、ピアノ教室から帰っていたときのことです。私は交差点で、信号が青だったので渡っていました。す

ると、左折してきた車に急ブレーキをかけられました。そして、まともや運転手に嫌そうな顔をされてしまいました。

このような経験から、私は交通ルールを守っていても、事故に合うことを思い知らされました。自分がどれだけ交通ルールをしつかりと守っていようと、相手が交通ルールをきちんと守ってくれるかどうかはわかりません。そして、私は交通マナーを守ることが交通事故を減らすためには大切だと考えました。特に、運転手の方には優しい気持ちを持って、交通マナーに気を付けてもらいたいと思います。マナーを守ることが、他者への思いやりとなり、それが転じて事故を防ぐ鍵になるのではないかと思います。また、運転手だけでなく、歩行者にとっても、交通ルールを守ることが、交通安全のために必要なことです。相手が交通ルールを必ず守るとは限りません。また、相手は自分のことが見えておらず、気付かない場合もあります。いくら自分自身が交通ルールを守っていても交通事故にあわないとは、限らないのです。

歩行者として交通ルールを守ることが必要最低限のことだと考えるときにも、相手が交通ルールを守るとは限らない、ということ意識する必要があります。交通事故につながりそうなことを連想、想定し、十分気を付けることが交通事故防止につながることで、私は思います。

このようなことは、日頃から学校でも教えられている大切なことですが、毎日のことでもあり、さらに急いでいるときなどは特に、気が緩んでしまいがちです。

交通事故はいつたれのもとで起こるかは分かりません。だからこそ、もっと交通事故防止の意識を持つべきだと思います。残念ながら、

今は歩きスマホやながら運転をする人が多くいます。そんな人たちに伝えたいです。たった一度の不注意で、命が奪われたり、奪ってしまったりすることがあるのだと。

交通事故防止のためには、個人の意識を変えることが重要であると述べてきましたが、組織的な取組についても考えてみます。

数年前から、「横断歩道を渡るときは、車は必ず止まる」というスローガンのもと、歩行者の安全確保を目的とした、啓発活動が実施されてきました。

私の祖父は、ウォーキングをやっていますが、このスローガンが出されてから愛媛県民の意識が高まり、横断歩道で止まってくれる人が増えた。最近運転手さんの意識が変わっていくのを実感できた、と話してくれました。また、愛媛県の自転車ヘルメットの着用率は、昨年七月の調査では、六九、三パーセントであり、全国平均の十七、〇パーセントを大きく上回っています。

これは、二〇二三年四月一日の道路交通法改正において自転車利用者のヘルメット着用が努力義務となりましたが、愛媛県内では、それ以前から条例等によって積極的に取り組んできた成果だそうです。

これらのことから、愛媛県の「交通死亡事故多発緊急事態宣言」や、「横断歩道を渡るときは、車は必ず止まる」という取組、「自転車利用者のヘルメット着用推進」への取組等により、課題となる案件を一つ一つ解消していくことも、交通事故防止につながる重要な手段だと思います。

毎日通る道を笑顔で

東温市立重信中学校

一年 橋本 悠叶

交通事故。交通事故は、時に一瞬で人の命を奪うもの、また、その人の家族の人生を変えてしまうとても恐ろしく、悲しいものだ。日々、通勤や通学、娯楽など、日常生活を送るためにたくさんの人々が様々な交通手段で外出している。外出するということは、いつ誰が交通事故の被害者・加害者になってもおかしくないのだ。日々、年齢や性別関係なく、誰もが交通事故の危険と隣り合わせであることを忘れてはならない。

僕は、毎日徒歩で通学している。そこで、毎日当たり前のように通っている通学路に危険個所がないかを調べてみることにした。僕が危険だと感じる箇所は四つだった。一つ目は、片側通行しかできない細い道だ。この道は車の通行量が多く、左右が田園で、時々車が田園に落ちているのを目撃することがある。この道を通らないと学校へは行けないが、歩行者専用道路もなく左右に白線も引かれておらず、とても危険な道だと感じる。二つ目は、友達と待ち合わせをしている横断歩道だ。この場所は最近、信号機が付き、たくさん的小中学生が利用している。信号機が付いたことで、歩行者は安全に横断できるようになったが、車の運転手は、これまで信号機がなかったため、赤信号に気付くことがおかれてしまい、急ブレーキを踏んでいる様子を見ることがある。三つ目は、歩道と歩道の切れ目の脇道から車が出てくる場所だ。似たような場所は他にもあった。歩行者・運転

者ともに、「来るかもしれない」というふうに意識しないといつ衝突事故が起こってもおかしくない場所だと感じた。四つ目は、学校付近の場所だ。中学校と高等学校が近く、通学時間も重なっているため、徒歩や自転車での通学生で混雑している。車の交通量も多く、信号のない横断歩道もあり、それぞれが自分勝手な行動をしてしまうと大きな事故が今にも起きてしまいそうだと感じる。

このように、学校への道はほとんど一本道であるにも関わらず、多くの危険があることに気付いた。横断歩道を渡る、左右を確認するなど、交通ルールの基本を徹底することが必要であるとともに、車は止まってくれるものだと言わず、歩行者である自分も注意する必要があると感じた。

通学路以外にも習い事へ行く道、友達の家へ行く道など、自分が毎日通る生活道路にどのような危険があるのかを意識しながら歩き、危険を感じた場所は、特に注意して歩こうと感じた。また、他者と一緒に歩いてみることで、自分だけでは気付くことができなかった危険が発見できるかもしれない。「自分は大丈夫」と過信せず、交通ルールを守ることはもちろん、いつでも「〇〇かもしれない」という意識を持ち、交通事故の被害者にも加害者にもならないようにしていきたい。皆がこのような意識を持ち、交通事故で悲しい思いをする人が少しでも少なくなるように、日々通る道を毎日笑顔で歩ける世の中をつくっていく一員でありたい。

ヘルメットをかぶっていても……

松前町立岡田中学校

一年 足立 穂華

私は、ドンという音におどろきました。辺りを見ると、自転車に乗っていた、おばあさんとバイクに乗っていた、お姉さんが倒れていました。初めて見た事故に、私はとても怖かったです。

車で家に帰っている途中だったので、車から降りて現場にかけ寄りました。おばあさんは、倒れたまま、起き上がらなかったため、救急車を呼ぶのか迷いました。ですが、他にも助けに来てくれた人がいて、警察や救急車を呼んでくれていました。周りの人と、協力して、車道から、歩行者道路に移動しました。おばあさんは、倒れたことが記憶に無く、ヘルメットをかぶっていたけれど頭を強く打った様子でした。一方お姉さんは、すべりこけた感じだったので、ひざに深い傷を負っていました。その深い傷を見て、私は言葉を失いました。たった一度の不注意で、こんなにも大きなケガをしてしまうのだと、身をもって知った瞬間でした。

その後、場所を示すため「救急隊の人に、手をふってください。」といわれたので、大きく手をふりました。救急車を見たことはあったけど実際、このような場面で手を振ったのは初めてでした。救急車は、いつも遠くの誰かを助けるものだと思っていました。しかし、この日の出来事を境に、その認識は、一変しました。救急車のサイレンは、遠い誰かのものではなく、自分達のような身近な人達のためにあることを知りました。

私の交通安全に対する意識は、大きく変わりました。それは、おばあさんは、ヘルメットをかぶっていたのににもかかわらず、頭を強く打ってしまい、かすり傷も負っていました。その時、私はゾッとしました。もしヘルメットをかぶっていなかったら、もっと大きなケガにつながっていたかもしれないことを想像すると、胸がしめ付けられる思いでした。

特に私は、自転車通学なのでヘルメットを着けるのは、習慣になっているけど初めは、少し面倒に感じることもありましたがおばあさんのケガを思い出すと、ヘルメットは、自分の命を守るとても大切な道具なのだと改めて感じます。

努力義務という言葉だけが先行し、なぜ、ヘルメットをかぶるべきなのか、その本当の意味が伝わっていないように感じています。おばあさんのケガを見て、私はヘルメットが単なるルールではなく、命を守るための道具だと身をもって知ったからこそ、このような状況が少し残念に思えるです。ヘルメットを持って運転している人を見かけると、「もし、あの時おばあさんがヘルメットをかぶっていなかったら……」という思いが頭をよぎります。ヘルメットをかぶらないということは、自分で自分の命を危険にしているのと同じだと私は感じています。なので私は、身近な人たちからヘルメットの重要性を伝えていきたいです。

友人や家族から自転車に乗る際は、面倒くさがらず、必ずかぶるよう声をかけるようにしています。この小さな声かけが、いつか相手の心に残り、自分自身の命を守る意識へとつながり、そして、その意識がまた他の人へと伝わってほしいです。交通安全は、一人が周りの人を思いやり、小さなことから行動していくことで、初めて、成

り立つものだと思います。車を運転する人が歩行者に気を配るように、私たち自転車に乗る側も、歩行者や車に配りよする。こうした思いやりの気持ちが安全な社会につながると思います。

今回の出来事は、私にとって、命の尊さを教えてくれた大切な教訓となりました。この経験は、私が自転車を乗り続けるにあたって決して忘れることはないとおもいます。あの日のことを胸に、常に安全を第一に考え、周りの人に配りよした運転を心がけたいです。おばあさんのケガは、私にとつて忘れられない教訓となりました。この経験を胸に、これからも交通ルールをしっかりと守り、安全な行動を続けていこうと心に誓っています。こうした、思いやりの気持ちが安全な社会につながると思います。そのためには、一人ひとりが交通ルールを守るだけでなく、「自分がよければいい」という考えを捨て、相手の立場になつて考えることが大切です。私たちは、たくさんの人々に支えられて毎日を安全に過ごしています。だからこそ、自分の命だけでなく周りの大切な人たちの命を守るためにも、互いに思いやりを持つことをこれからも大切にしていきたいです。



事故の無い世の中へ

宇和島市立城北中学校

一年 高月 七々桜

みなさんは、交通安全について真剣に考えたことがありますか？私はこの夏、家族で話し合う機会がありました。なぜかというところ、帰省中の兄が事故を起こしたからです。幸い軽い自損事故で怪我もありませんでした。事故を聞いた時はとても驚きました。兄本人も、車を買ったばかりの事故でショックを受けて落ち込んでいました。

今回の事故は、誰も怪我をしなかったけどもし誰かを巻き込んだり、兄に万が一の事があつたりしたらと想像すると、とても怖くなりました。

この事故を通して、将来自分がハンドルを握った時の責任の重さや命を預かる大切さを改めて考えさせられました。

交通事故は車に限ったことではありません。私は自転車に乗るのが好きです。ヘルメットを被って頭を守ること、スピードを出し過ぎないこと、出会い頭の事故に合わないようカーブミラーを確認したり、一時停止する事などを心掛けて乗っています。

家の周りの道は狭いけど、近くに保育園もあるので交通量が多く、小さな子供もたくさん居るので、自分が被害者にならないだけでなく加害者にもならないように注意して運転しなければならないと思います。

私は小学生の頃、教頭先生の友人が事故に合った話を聞いた事があります。ヘルメットを被っていたおかげで大した怪我にはならな

かったそうです。事故に合わないことがもちろん一番大切ですが、もし事故に合った時にどうすれば自分の命を守れるか考えて備える事も重要だと思います。

最近では、自転車に関する法律も厳しくなってきました。それは、みんなの安全を守るために必要な事です。自転車も車と同じように、ルールを守って乗る事で安全かつ便利な乗り物になると思います。

テレビでは、毎日のように事故のニュースが流れます。車同士の事故、車と自転車の事故、車と歩行者の事故、高齢者の逆走など、様々な事故が起きています。そのほとんどが信号無視や脇見運転、居眠り運転、スピードの出し過ぎなど、少し気を付けていれば防げていた事故ばかりに思えます。誰かが少し気を付けなかったせいで、何の落ち度もない他の誰かが亡くなってしまうたり、大怪我を負ったりするのは、あまりにも悲し過ぎます。事故は起きてからでは取り返しがつきません。どんなに後悔して謝っても、亡くなった人は家族の元に戻って来ないのです。その人と一緒に過ごすはずだった明日は一生訪れないのです。みなさんはハンドルを握る時、その責任を十分背負えているでしょうか。例えば、体調が悪い時は運転をしない、歩行者がいる時はスピードを落とす、交差点では譲り合うなど、日頃から一人一人が心に余裕を持って運転することで、悲しい事故は減らせると思います。

私の母は十年ほど前、ストレスから体調を崩して、めまいの酷かった時期が二年ぐらいたったそうです。その期間は、どんなに不便でも絶対に運転をしなかったと聞きました。自分の身勝手な行動で誰かを傷付けてはいけなかったからだそうです。私はその母の考えがとても立派だと思いました。だから私も、自分の安全と共に周

りの人達の安全にも目を向けられる大人になりたいです。そうなるために、交通安全の事について今からしっかり学んでおこうと思います。そして、大人になった時、その知識を生かして交通安全に貢献出来たら嬉しいです。

このように、交通安全について真剣に考える機会を持てた事は、私のこれからにとってとても貴重な財産になりました。自分や家族や友人が安全で幸せな生活を送るために、今出来る事を少しずつ実践していこうと思います。また、そう考える人達が増えて、交通事故のない世の中になる事を願っています。



命を守るための対策

愛媛大学教育学部附属中学校

二年 井上 咲愛

周囲が真っ暗となった冬の夕方。部活を終え、バスで帰宅する頃には、標識看板すら認識することができないほど私の視界はどこを見ても黒色に覆われています。冬は陽が落ちるのが早いいため、家に到着する十八時頃であったとしてもこのような状態となってしまうのです。日没が早いと、視覚から認識する正面や曲がり角からやってくる自動車や自転車の存在に気付かず接触し、交通事故へとつながる危険性があります。そのため、冬の下校は、春、夏、秋といった他の季節よりも一層周りの様子に注意をして行動しなければなりません。しかし、周囲の音や声をよく聴いたりするなどしてどれだけ気を配っていたとしても、五感の中で最も重要とされる視覚をほとんど取り入れることができれば、今起こっている状況を理解することは非常に困難であり、不慮の事故につながりかねないと感じます。

そこで私は、冬の下校時には特に「自分の存在を主張すること」が大切であると考えます。一つは、背負っているカバンや補助バッグなどに反射キーホルダーをつけること。キーホルダーとして常時持ち歩くことで、たとえ自分が周りを見えていなかったとしても反射の光によって相手が自分に気づいてくれることで事故を未然に防ぐ手段となると思います。もう一つは、ライトを使って周囲を照らしながら歩くこと。この方法は私が下校時に実際に対策しているものの一

つでもあります。足元を照らすだけでも、周囲が格段に見えやすくなるので、歩いている際に障害物とぶつかり怪我を負うといった可能性を減少させることができます。足元だけでなく、正面や真横など、さまざまな方向を明かりによって視覚の認識を可能にするため、自動車や自転車などとの接触といった事故も減らすことができます。考えます。また、ライトを照らすことで、光で反射キーホルダーのような役目を果たし、相手も自分の存在を認識してくれるようになるので、夜道にライトを持ち歩くということは非常に大切であると考えます。暗い場所では自分がどれだけ動いて存在を伝えようとしても、相手にとっては視覚による情報の伝達がないため自分の存在が伝わりづらいです。そのため、暗い場所での光による自分の主張は、もつとも簡単に交通事故を防ぐことができる対策の一つであると考えます。

また、私は道具を使つての対策と同時に、「自分自身の行動」による対策も重要であると考えます。例えば、下校時に通る道なるべく街灯が多い道や歩道の広い道に変更することや、自動車が通つてくるかしっかりとカーブミラーを見て判断すること、道路を横断する時は一度止まり、右、左、右を意識して通るといったものが挙げられます。多少家まで遠回りになったとしても、比較的環境の良い道を通つて下校することで、自身の安心感や最も重要な安全性が得られるため必要なことであると思っています。また、寄り道やながら歩きといった「少しなら大丈夫」の気持ちから発生してしまう事故を引き起こすような行動は決してあってはならないことです。歩行者も交通ルールはしっかり守ること、常に正しいと思う行動を取って事故は起こさない、起こさせない考え方で全員が対策できるようになってもらえる

よう願っています。

私は、今まで一度も交通事故にあつた経験がありません。ですが、この先も事故にあわず、いつまでも健康に過ごすことができるといった保証はどこにもありません。これは、誰に対しても断言することができません。徹底的に事故の対策を行っていたとしても、可能性がゼロに消えることはないのです。しかし、それでも限りなく事故が起これないように私たちができることは、交通に対する意識を高め、対策をすることのみです。何のために交通ルールが存在するのか、何のために信号があるのか、「何のために」を今一度改めて考えてみること、新たな気づきが生まれるかもしれません。

このように、冬の下校時には多くの危険が潜んでいるからこそ、一人ひとりができることを積極的に実行していくことが大切です。今回は冬の夕方の暗さの問題をテーマに考えてみましたが、出てきた対策は冬の時期だけではなくいくつもの機会に活かすことができます。普段の何気ない生活を安心、安全に過ごすことができるようにするには、自身で行う日々のちよつとした心がけが重要です。そしてその心がけが少しずつ積み重なり、自分、そしてみんなの命を守る大きな力となる世の中を待ち望んでいます。



祖父の免許返納と理想の高齢化社会

松前町立岡田中学校

二年 安村 心希

「愛媛交通死亡事故多発・緊急事態宣言・上半期、十万人当たり死者数全国ワースト」最近見たニュースである。

毎日のように交通事故のニュースを耳にするが、特に驚いたニュースは「徳島道 高速バスとトラック正面衝突し炎上 2人死亡12人重軽傷」だ。事故をしたバスは日常よく目にしている伊予鉄バス。伊予鉄バス＝安全と思っていた僕には衝撃的なニュースであつた。

あるニュース番組で事故が増えている原因として、次のようなことが挙げられていた。

- ①自動車運転手の前方不注意
- ②日照時間の長さ
- ③新年度から時間が経ち、緊張感の減少

このように原因は様々だが、一瞬で大切な命を奪ってしまう事故は、みんなの意識次第で、必ず防ぐことができるはずだ。

中でも僕が一番気になっているのは、高齢ドライバーによる交通事故だ。アクセルとブレーキの踏み間違いによる事故や逆走である。高齢化が進む社会では高齢ドライバーが増えるのは当然のことであるが、高齢者の事故は防ぐことはできないのだろうか。

この夏、僕の祖父は免許を返納した。しかし、免許を返納するのはそう簡単ではなかった。祖父はもう八十四歳ととても高齢で、安

全な運転が次第に難しくなっていた。祖父が運転する車に乗ったとき、曲がるところを間違えそうになったり、スピードが遅すぎて後ろの車のドライバーをイライラさせたり、視野が狭くなって曲がってくる車が見えなかったりと、ハラハラすることも多くなっていた。

しかし、長年無事故で安全運転をしていた祖父は、「自分は大丈夫。まだあと一、二年は乗れる。」と言って、危ないと言う自覚はなかった。むしろ、車がなくなると交通手段がなくなってしまうため、免許の返納をすぐ拒んでいた。もし、もっと交通の便がよかったら、あつさりと免許を返納すると言ってくれたかもしれない。家から駅までが遠すぎる、シャトルバスは通っていない、タクシーを乗るにしてもタクシー代が高いなど、様々な問題点があった。だから、免許の返納はより難しくなったのではないだろうか。僕も家族も心配で免許返納を進めた。祖父の気持ちを傷つけないように、車の運転中にイライラさせないようにしながら、事故がとても心配なことを僕なりに伝えたりもした。しかし、祖父は耳を傾けてはくれるが、「じいじは大丈夫よ。」と返納しようとはしてくれなかった。困った母は、祖父の事故を心配して医師に相談し、医師から話をしてもらって免許を返納することになった。僕は本当に安心した。これまで事故を起こしたことがなかったのに、最後の最後に事故を起こしてほしくなかったからだ。子供が好きで、地域の環境教育を進めていた祖父。孫の僕と一緒に自由研究をしてくれたり、ご飯に連れて行ってくれたりした祖父。そんな優しい祖父の笑顔や命を守れた気がした。

祖父は無事、免許返納することが出来たが、車がなくなった時の交通の不便さへの不安も、高齢者の交通事故に繋がっていると僕は思う。事故をなくすためには、もっと交通の便を良くしたり、免許

返納の年齢を定める法律を作ったりするなど、高齢化社会に合ったものにする必要があると思う。そうすることが高齢者のためだけでなく、社会全体のためにもなると思う。

交通事故は起こるのは一瞬だけど、奪われるものは大きい。だから、自分の身は自分で守らなくてはならない。しかし、守りたくても自分だけでは守れないこともある。僕たちは、自分を守るとともに、他人を守ることも考えなくてはならない。車を運転する人は、人の命を預かっているという自覚を持つこと。自転車や歩行者も、危険を察知できなくなる可能性が高まるながらスマホ、イヤホンやヘッドホンを付けての運転や歩行はやめるべきだと思う。交通事故は被害者と加害者、そしてその家族の人生を奪ってしまう。交通事故のない社会をつくるために、僕も自分には何ができるのかを考え、行動に移していきたいと強く思っている。



「交通事故を防ぐために」

大洲市立脇川中学校

二年 安川 涼

私は毎日のニュースで、交通事故の話題を目にすることがあります。事故の内容はさまざまで、小さな怪我で済むものもあれば、後遺症が残ってしまう、命を落としてしまうなどの悲しい事故まであります。私がこのテーマを考えるようになったのは、いとこと散歩に行ったとき、見かけたことがきっかけでした。

部活も休みの日、いとこが遊びに来て、一緒に散歩に行っていると途中、スマートフォンを見ながら運転している車を何度か見かけたことがあります。ハンドルを片手で持ち、もう片方の手で画面を操作していたり、視線がずっと下に向いていたりする様子を見て、とても怖いし、危ないなと思いました。あのような状態で、もし前から人が飛び出してくるようなことがあったら、すぐに止まれるとは思いません。

交通事故の原因は、一つではありません。スピードの出しすぎ、スマートフォンを見ながらの「ながら運転」や、信号無視、歩行者の飛び出しなど、さまざまな要素が重なって事故は起こります。特に最近では、運転中にスマートフォンを見て、運転に集中できなくなる「ながら運転」が大きな問題になっています。

ながら運転が原因で起きた事故は、実際に多数報告されています。ニュースでも、スマホを見ていたドライバーが前を見ておらず、歩行者をはねてしまったという事件を耳にすることがあります。ドライ

バーは、「ちょっとだけ見ていただけ」「通知を確認していただけ」など、わずかな油断が大きな事故につながってしまうことがあります。

また、ながら運転は車に限らず、自転車やバイクでも起こっています。イヤホンをつけて音楽を聴きながら運転したり、スマホを操作しながら、傘を差しながら、自転車に乗ったりする人も少なくありません。こうした行為も、歩行者や他の車両との接触事故の原因になります。自転車は、バイクや車ほどスピードは出ないので大丈夫と思うかもしれませんが、ぶつかれば大きな怪我につながる可能性があります。

こうした事故を防ぐには、法律や取り締まりだけでなく、一人一人の意識が必要です。「自分は大丈夫」と思い込むことが、一番危険です。ながら運転の怖さは、他の事故と同様に、自分だけでなく、他人の命をも巻き込んでしまうかもしれないということです。自分の一瞬の油断が誰かの人生を大きく変えてしまうかもしれないという責任を持たなければいけません。

私たちができることは、まず自分自身も行動を見直すことです。歩くときも、自転車に乗るときも、スマートフォンを見るのはやめて、周りに意識を向けることが大切です。交通ルールを守るのは当然ですが、それ以上に「思いやりのある行動」が事故を防ぐ鍵になっていると私は思います。

たとえば、自分が先に止まって相手を先に通すことで、事故を避けられるかもしれません。急いでいるときでも、「もし今スマホを見ていて誰かを傷つけたらどうなるか」と想像してみることで、行動を変えるきっかけになるかもしれません。

交通事故は、他人事ではありません。誰にでも起こりうる問題です。だからこそ、私たちは「ながら運転は絶対にしない」という強い意志を持ち、日常の中で意識的に安全を守っていく必要があります。家族や友達、大切な人たちのためにも、自分が安全な行動をとることが、周りにも良い影響を与えたいと思います。

私は将来、バイクと車の免許を取りたいと思っています。そのときは、交通ルールを守るだけではなく、「思いやりのある運転」ができるようになりたいと思っています。そして、今の自分にできること、たとえば自転車の安全確認や、信号を守るなどをしっかり実行していきたいです。

ながら運転による事故は防げる事故です。一人一人がしっかりと責任を持ち、注意深く行動すれば、確実に事故の数を減らすことができます。と思います。私はこれから、常に周りを意識し、交通安全に対して真剣に向き合っていきたいと思っています。



未来のために

八幡浜市立保内中学校

二年 松本 名里

私の家の横には道路があり、そこから少し歩けば、横断歩道がある。小学生のころ、友達と遊ぶことが増え、待ち合わせ場所に行くためには、横断歩道を渡らなければならず、いつも車が通りすぎるのを待ったときに「早く行きたいのに……」とイライラ、モヤモヤしていた。あるとき、友達と遊ぶ約束をしていたが、準備に時間がかかり、予定していた時間よりも五分ほど家を出るのが遅れてしまった。いつもはどんなにギリギリでも、「しょうがない」と思い、横断歩道を渡っていたけれど、その日はどうしても早く行きたくて、「まっ、いいか」という気持ちの方が勝ってしまった。私は、横断歩道のない道路を横断してしまったのだ。

その日から家を出る時間が遅くなったり、帰る時間がギリギリになったりすると、道路を横断することが多くなった。先生からも母からも「横断歩道がない道は危ないよ。」とたくさん言われていたのに、たった一度ルールを破ったことで、私の中の「これくらいなら大丈夫だ」という気持ちが、どんどん大きくなっていった。そこには、罪悪感すら感じていない私がいた。

そんなある日、いつものように友達と遊んでいると、気が付けば時計の針は四時五十五分になっていた。私の家の門限は五時。叱られたくなかった私は、何のためらいもなく、いつものように道路を横切ってしまった。その瞬間、左車線に止まっていた車と重なって見えなかった右折車が、目の前に現れた。パニックになり、どうすれ

ばいいかわからなかった私は、そのまま走って道路を横断してしまった。大きなクラクションが鳴った。間一髪で私を避けてくれた運転手は、私を見て、「こんな周りが見えないところを横断したら危ないよ。」と優しく注意してくれた。

もし、運転手の人が私を避けられなかったらどうなっていたらと思うと、怖くなった。もし、道路が今よりもっと狭かったら、もし、後続車が何台も続いていたら……。いろいろな「もし……」が、私の頭に浮かんできた。運転手さんに対して申し訳ない気持ちでいっぱいになった。

この件をきっかけに、私はなぜ横断歩道があるのか、どんなところに設置されているのか、なぜ横断禁止という言葉があるのかを考えるようになった。そして、歩行者側だけではなく、運転手やその車に乗っている人の気持ちも考えるようになった。交通ルールを守ることは、自分の命を守るためでもあり、他の人の命を守ることもである。歩行者が安心して街中を歩ける環境、運転手が安心して運転できる環境を作ることにもつながる。一人一人の心掛けや意識、そして、歩行者と運転手との意思疎通、信頼関係が大切になってくると思う。

交通事故をなくすためには、どんな場面においても「きつと○○だろう」という楽観的な予測ではなく、「もしかしたら○○かもしれない」という危険を感知する予測が大切だと思う。そんな危険を予測する力を高めるために、毎年、私たちの学校では交通安全教室が実施されている。その授業の中で、私たちは、普段の生活の中に隠れている危険や「もしかしたら」からつながる様々な危険について、シミュレーションサイトを使って学習している。この危険予測トレーニングは、交通状況に応じた正しい観察力と危険予測能力を高め、危険を回避して交通事故を防ぐというものだ。自動車編だけではな

く、歩行者編や自転車編があり、中学生の私たちにとっても、とても勉強になる。この授業を通して、歩行者と運転手の判断のずれから起こる事故やそれぞれの不注意から生まれる危険など、様々な事例を学んだ。実際の映像を見ると、歩行者からは見えていだろうと思ったことが、運転手側からは見えていないなど、相手について理解しようとする気持ちがないことにより、危険が生まれるということが分かった。たった一度の判断の甘さが、大きな事故につながるということをシミュレーションサイトで実際に体験し、自分自身も被害者にも加害者にもなりうる存在なのだ実感した。こういう危険予測シミュレーションを用いた学習は、交通事故をより身近なものとして考えるきっかけを与えてくれた。

私たちが安全に地域で暮らすには、車と歩行者の意思疎通、そして、相手のことを思う思いやりの気持ちが必要だ。また、交通ルールは「守られているもの」ではなく、「自分や周りの人のために守るもの」だと改めて思った。これから自転車に乗るときや歩くとき、そして、大人になって車を運転するときなど、いろいろな場面でも、この交通安全教室で学んだことを意識しながら、自分自身の命も家族や大切な人の命も守れるように、安全に行動したいと思う。



「自転車と私の約束」

愛媛大学教育学部附属中学校

三年 小田 和佳

私は毎朝、自転車で学校に通っています。家から学校までは三口ほど。交通量の多い交差点や、信号の多い道を通り、時間にしておよそ十五分の距離です。自転車は私にとって身近な存在で、歩きや電車よりもずっと早く学校に着くことができます。しかし、ある日、その便利さに慣れきっていた私は、交通安全の大切さを痛感させられる出来事を経験しました。

それは、三年生になって最初のテストの日の帰り道でした。テスト日はいつもより早く学校が終わるので、のんびりと帰っていたら、あともう少しで家に着くというところの手前の十字路で、角から急に自転車が飛び出してきました。私は咄嗟にブレーキをかけたけれど、自転車同士で正面衝突してしまいました。その時の自分の心臓は、ドキドキと早鐘のように鳴っていたのを、今でも鮮明に覚えています。幸い、お互い特に怪我はありませんでした。本当に良かったです。中学生になって、自転車通学を約二年半続けている中で、一番怖い思いをしました。

その場所から家までは二分くらいの距離ではあったけれど、その間がとて長く感じ、「もしお互いもっと早いスピードだったら」「もし私がかつと先にいて体に直接ぶつかっていたら」そう考えると背筋が冷たくなりました。家に帰った後、母にこの出来事を話すと、母は少し驚いた顔をしながらも、

「怪我をしなかった本当に良かったね。でも、交通ルールはしっかりと守ることで安全を作っていくことができるんだよ。」

と教えてもらいました。その言葉が、私の胸に深く刺さりました。

それから私は、自転車に乗る時のルールを自分なりに三つ決めました。一つ目は、歩行者や車が近くにいるときは、スピードを場面に合わせて落とすこと。二つ目は、人通りの少ない十字路や住宅街でも耳を周囲に傾け、音にも集中すること。最後の三つ目は、自転車の付いているミラーや道路に立っているカーブミラーをより上手く利用して安全に努めることです。これらを意識していくことで、落ち着きを保って、時間と心に余裕が生まれるようになりました。実際にやっているのと、前までは朝急いで走っていたのが、少し早めに家を出発して安心してペダルを漕げるようになり、自分の日々の生活習慣も改善されている気がします。そんな日が続いた数日後、事故に遭った同じ場所、すぐ目の前で自転車が横から走ってきたのを見ました。前の私なら何も考えずに普通に進んでいたと思います。でも、そのとき私はスピードを落として十字路にあるカーブミラーを確認して渡りました。何気ない出来事が一つ一つ積み重なっていくことで心がとても温かい気持ちになります。

私は、高校生になっても自転車で乗り続けることになりました。交通ルールを守り、安全を一番とすることは欠かせません。また、安全運転は自分の身を守るだけでなく、周囲の人にも安心感を与えることを、今回の件を踏まえて実感しました。

学校でも標識を守ること、事故の大半はわずかな油断から起こることなどの重要な交通安全について先生からお話をいただくことがよくあります。自分で決めたルールも学校で教わったことと一致して

いる内容がほとんどです。言われなくても、本当はルールをしつかりと決めなくても、当たり前前に交通に対して理解を深められる人になりたいと考えています。

自転車は、便利で環境にもやさしい乗り物です。しかし、便利さの裏側には常に危険が潜んでいます。ちょっとした一瞬の油断や焦りが、事故へとつながっていくことを忘れてはいけません。自分の生活に欠かせない自転車だからこそ、より意識して歩んでいくことが必要です。慣れている道ほどルーズになりやすくなるので、まずは私のよく使う道からその意識を広げていきたいです。

この経験を通して学んだことを、私はこれからも、ただペダルを漕ぐだけでなく、安全という心も一緒に乗せて、進んでいきます。



事故は突然やってくる

松山市立三津浜中学校

三年 小林 悠人

昨年の五月末、母が台所で夕飯の準備をしていると、母のスマホが鳴りました。父からの電話でした。私はちょうど部活が休みで家にいたのですが、変な時間にかかってきたなと思いました。会話の内容は「帰宅途中、バイクで事故にあった。これから病院に運ばれて、おそらく検査を受ける。大丈夫なので来なくて良い。」と言うものでした。当たり前のことですが、とても驚きました。父と母はいくつかやりとりをし、母は最後に

「やったんか？やられたんか？」

と聞きました。父はとても答えにくそうに、

「当てられた。」

と答えたそうです。母は電話を切り、私たち兄妹三人に向かって

「怪我の大きさは分からんけど、意識もはつきりしとるし、大丈夫。とりあえずいつも通りご飯食べよう。」

と言いました。弟はそわそわしていました。妹はよくわからなかったようで、不思議そうな顔をしていました。

しばらくして、またスマホが鳴りました。父から「検査の結果を説明するときに、家族の付き添いがあるらしい。一人で大丈夫、と言ったけど駄目だった。きてくれないか。」という電話でした。夜、子どもだけでは家にいられないので、母はすぐに隣に住む祖父母へ応援を頼みに行きました。そして私たちに

「大丈夫だから、寝ときなさい。」

と言って病院へ出かけました。それから一度「傷だらけの父に会えた。」と言う連絡があったきり、深夜に帰ってくるまで連絡はなかったのですが、私はとても心配になりました。この出来事によって、私は事故の本当の怖さを知ることになりました。

後になって母にあの日のことを聞くと、

「どう見てもだめなのに、歩く歩くと行って事故現場へバイクを取りに行った。アドレナリンがブシャーッと出とって、痛みに気づかなかつたんやと思う。検査で異常はなかったと聞いたけど、後から出てくる異常もあると言われたけん、帰ってから夕飯を温めている間にお父さんが寝てしまつて、本当に怖かった。でも、一階で寝たら？とか、もう少し冷やしとこう？って言つても全然言うこと聞かんかった。アンタとそっくり。」

と言つて笑つていました。次の日に見てみると、手足は傷だらけで、足は紫色に二倍近くに膨れ上がり、どこからどう見てもけが人で、よく帰つてこれたなあと思いました。

事故に遭う可能性は誰にでもあると思いますが、私は父が事故に遭つたことがとても意外でした。私の父は運転に関しては子供の目で見てとても慎重なので、父の不注意によるものだとは思えなかつたのです。事故の原因を聞いてみると、バイクでまっすぐ走つていたところ、反対車線から急に車が曲がってきて、避けきれなかつたそうです。相手の車の運転手さんは、ひたすら謝つていたと話していました。

また、今年の四月には松山市内で中学生の自転車事故がありました。事故のニュースを見た日には、単に「怖いなあ。」としか思わなかつたのですが、後日事故にあったのは部活の後輩の友達で、事故以来

意識が戻つていないことを知り、怖さが二倍にも三倍にもなりました。

交通事故は、事故にあった人だけではなく、家族の生活を大きく変えます。母は毎日傷の手当てをし、怪我人のお世話という仕事が増えました。祖父は、病院や警察への送迎をしてくれました。弟妹は「遊んでもらえない。」と残念そうでした。また、仕事を三週間休み、職場の方に仕事の穴埋めをしてもらいました。交通事故は、事故の当事者だけではなく、周りの多くの人をも巻き込むなど痛感しました。小学校では、一年生で歩き方教室、三年生で自転車教室等交通安全指導が行われています。それから六年が経ち、事故を起こさない、事故に遭わないためにどんなことに気をつけなければ良いのかぼんやりとしか思い浮かばなかつたので、調べてみました。すると「安全運転五則」というものを見つけることができました。

○安全速度を必ず守る。

○カーブの手前でスピードを落とす。

○交差点では必ず安全を確かめる。

○一時停止で横断歩行者の安全を守る。

○飲酒運転は絶対にしない。

今までなんとなくで気をつけていた点が、文字にすることではつきりしました。

父の事故をきっかけに、これまで以上に交通安全に対する意識が高まりました。

「どんなに気をつけても事故は起こる」

と言うことを忘れず、日々気をつけて行動したいと思います。

事故を未然に防ぐために

久万高原町立久万中学校

三年 丸山 莉央

「事故」この言葉は、毎日目にしたり、耳にしたりする。それほどいつどこで発生するか分からない身近なことなのに、私はどこか他人事のように思っていた。目の当たりにしたことがなかったし、氣をつけていたら大丈夫と安易に考えていたからだ。しかし、この考えが一瞬にして消える出来事があった。

二年前の夏、祖父、祖母、母、弟、私の五人で出かけた帰り道、運転席のすぐ後ろの席で眠っていた私。「ドン！」経験したことのない衝撃で目を覚ました。何ともいえない臭い匂い、車の前方から白煙、ガラスが散乱した車内。怒る祖父、私たちを心配する祖母、恐怖のあまり放心状態の弟、そして血だらけの母。「事故に遭ったんだ」とすぐに分かった。救急車が来るまで何もできず、じわじわと顔が腫れる母を見て、恐怖心だけが大きくなった。時間の経過が遅く感じた。しばらくして救急車が到着し、車から脱出できたとき、もう大丈夫と安堵した。救急搬送され検査したところ、私たち姉弟は軽傷だった。しかし母は、外傷性くも膜下出血と顔面多発骨折の重傷だった。そして、HCUに入院した。

母の経過は良好で、三日後に退院した。家族が揃い嬉しかったが、生活は一変した。弟は事故の恐怖心から、外に出ることが怖くなり、学校を休むようになった。私は体の痛みがあり、部活が思うようにできなくなった。そして、退院したものの絶対安静の母。今まで家

のことは全て母一人でこなしていたが、この日から会社を休んで父がするようになり、弟と私も自分ができることをした。その後、私は二カ月、弟は半年通院した。母は手術し、二年経った今でも通院している。

私が遭った事故は、下り車線を走っていた二トトラックがセンターラインを越えてきたことによる正面衝突だった。スピードの出し過ぎかな、脇見運転かな、居眠りかな……。私は、トラックの運転手に強い怒りを覚えた。氣をつけてさえいてくれてたら、事故に遭わなかったのに……と。

後日、警察官から、「事故の原因は、トラックがスリップをしたことによるセンターラインのはみ出しである。スリップしたら、ハンドル操作はできにくくなる。ブレーキも効かない。でも、おじいちゃんがぶつかる直前にハンドルを左に切ったから、事故は最小限に抑えられた。」と聞いた。スリップしてしまったら、ハンドルもブレーキも制御不能になることを初めて知った。交通ルールを守り、どんなに氣をつけていても防ぐことのできない事故もあるのかもしれないと思った。同時に、咄嗟の行動で被害を抑えられることを知った。

事故に遭ってから、以前よりも事故に関する記事に目が止まるようになった。最近最も印象に残っている事故は、今年七月に発生したトラックと高速バスの事故である。通ったことのある道で、また利用したことのある高速バスだから、この事故が頭から離れなかった。事故の原因は、トラックのタイヤがバーストしたことにより、センターラインを越え、高速バスと正面衝突したことのようなのだ。私が遭った事故と似ていた。

どちらもタイヤの異変で発生した事故。スピード超過や飲酒運転

など運転手に明らかな過失がある事故ではない。走行中に突然異変が起こり発生した事故。一見防ぎようがない、不運であると思うかもしれない。しかし、車に乗る前にタイヤを見て、擦り減っていないか、ひび割れが入っていないか、など異変がないかチェックしていたら、未然に防ぐことができた事故かもしれない。

今、この瞬間にもどこかで交通事故は発生している。どこにもぶつけることのできない悲しみや怒り、不安や絶望、激しい喪失感を抱く人がいる。私も事故に遭ったからこそ、事故は減らしていかなければならないと強く思う。交通ルールを守る、車検を受ける、といった義務付けられている最低限のことはできている人が多い。しかし今一度、ハンドルを握る前に、万全な体調であるか、車も異変ないかチェックしてほしい。小さな異変や一瞬の判断ミスから事故は発生し、大切な人や見ず知らずの人の人生を大きく変えてしまう可能性があるがあることを改めて考えるべきだと思う。そして運転手、歩行者：全ての人が、心と行動にゆとりと思いやりをもち、「くかもしれない」と悪い状況を想定して行動してほしい。そうすることによって、事故を一件でも多く未然に防ぐことができると思います。社会全体が一歩進んだ心遣いのできる世の中になることが私の切実な願いだ。

ヘルメットの重要性

大洲市立大洲北中学校

三年 宇都宮 巧

僕たち子供にとって一番身近な乗り物「自転車」。小学生の頃から乗っているものだから、緊張感や危機感を持って運転している人は、少ないのではないだろうか。しかし、自転車は道路交通法上「軽車両」に分類されるため、事故を起こした場合は、自動車と同様に届け出さなければなりません。

政府統計の総合窓口というサイトに「上半期の交通死亡事故の特徴及び道路交通法違反取締状況について」という項目があります。その中にある「状態別死者数の推移」というデータを見ると、自転車乗用中の事故で亡くなった方は今年上半年で百三十九人、全事故死亡者数の十二・〇パーセントを占めていました。さらに「自転車乗用中のヘルメット着用有無別死者数の推移」のデータから、自転車事故死亡者数の八十九・二パーセントはヘルメットを着用しなかったということが分かりました。また、七月三十日の愛媛新聞にも「自転車事故の死者数は百三十八人で、半数以上が主に頭部に損傷していた。」とあり、これらのことからヘルメットの着用が命を守ることにつながることが読み取れます。

そして、この夏、僕はヘルメットの大切さを深く実感することがありました。自転車乗用中に車と衝突したのです。

その日、僕は図書館に行こうと、毎日通る家の近くの横断歩道を自転車で渡っていました。いつも通り渡って、その後もいつも通りの

日常があるものだと思っていました。しかし、気付いたら道路に倒れていたのです。全く訳が分からず、自分から数メートル離れた所に車が止まっていたので、とりあえず、

「大丈夫ですか？」

と、車中の女性に声を掛けました。反応がなく、お互い戸惑っているうちに警察官が来て、僕を近くの家の日陰スペースに案内してくれました。ちょうどパトロール中だったようです。その後は警察官の言うとおりに母に電話して、近所の飲食店の方の手当てを受け、救急車で病院に行きました。僕も母もこの時は事故状況より、怪我のことで頭が一杯でした。

怪我はCT検査もしましたが、幸い沢山の擦り傷で済みました。しかし、後日、介抱してくれた飲食店の方や修理依頼した自転車店の方の話を聞き、この程度の怪我で済んだことが奇跡と思うと同時に、ゾッと怖くなりました。目撃者の話では、ドンとすごい音がして、自転車空を飛んだらしく、自転車は全損、ヘルメットは擦った跡や小さい穴があったそうです。考えてみると、擦り傷もヘルメットから出ているこめかみ付近とその下の肩が一番ひどかったことから、ヘルメットがなかったら……。そう思うと、ヘルメットに非常に感謝しました。

僕が住む愛媛県は、ヘルメットの着用率が約七〇パーセントで、これは全国一位の着用率です。僕も自転車デビューした時から、当たり前のようにヘルメットをかぶっていました。しかし、この僕の当たり前は交通事故で息子さんを亡くされた渡邊明弘さんの『もう誰にも自分のような後悔をしてほしくない。』という強い思いや活動、愛媛県のいち早い取り組み、愛媛県民の皆で命を守ろうとする意識や、

着用しているのが当たり前という環境があって築かれたものだと思います。僕がそうであったように、車とぶつかった衝撃で意識がなかったら手で頭を守ることはできません。もし意識があったとしても、守り切れるかどうか分かりません。だからこそ、ヘルメットは必ず着用しようと思いました。

ヘルメット着用だけではなく、今回の事故で交通ルールを守る、周りを過信せず焦らず譲り合う精神が大切なことも学びました。自転車は車両なのに、僕は乗ったまま横断歩道を渡っていました。「このくらいなら。」という気持ちがあったから、事故が起きたのだと後悔しています。擦り傷で済んだ今回の事故でも、たくさんの人に心配や迷惑を掛けてしまいました。皆を不幸にしてしまう交通事故。二度と起こさないように一層注意したいと思います。



大切な命を守るために

西予市立三瓶中学校

三年 井上 玄

母が僕に「ラジオで背筋の凍るような話をしていたよ」と話し掛けてきました。女の人が男の人に「金のヘルメットと銀のヘルメット、あなたが落としたのはどちらのヘルメットですか」と尋ねたそうです。それを聞いて僕は、どこかで聞いたことのある話だなと思いました。この後、男の人は「落としたのは白いヘルメットだ」と返答しました。すると、女の人は「あなたが本当に落としたものは命です」と言ったそうです。母は僕に「これ、怖くない？」と真剣な顔で聞いてきました。僕はその一言でこれは遠い過去の話ではなく、身近に起きている出来事なのだと察しました。

テレビでは、歩行者と自転車がぶつかって歩行者が怪我をしたとか、最悪の場合亡くなってしまったとかいうニュースが流れています。それを耳にする度、僕は自転車が大きな事故を引き起こしていることに恐怖を感じています。それは、毎日乗っている自転車が、一瞬にして誰かの命を奪う危険性をはらんでいると思っただけです。たかが自転車と決して軽く考えてはいけなかったと思いました。

僕にとって自転車は、今や生活の一部分。通学や買い物、行き帰りなど、様々な場面で欠かすことのできない身近な乗り物です。ヘルメットの着用は、学校や社会のルールとして義務付けられています。だから、僕は小学生の頃からずっと、どんなに短い距離でも必ずヘルメットを被り、それを当たり前のこととして続けてきました。

ヘルメットを被ることを面倒だと思ったことはありません。それは、自分の命を守るために大切なことだと知っているからです。だから、先程のラジオに込められたメッセージは、僕にとつてとても重みのあるものを感じました。

ヘルメットを被っていても、命を落とすことがあります。より身近な出来事として、僕自身の経験による気付きが大きいです。雨が止んだあとに自転車で出かけたときのことです。左折しようとハンドルを切ったところ、道路が濡れていた影響で自転車のタイヤがスリップしました。僕は体勢を崩し、自転車ごと転倒しました。次の瞬間、体が道路の白線からはみ出し、後ろから来た車にひかれそうになりました。あと数十センチずれていたら人生が変わっていたかもしれません。当時のことを思い出すと、今でもぞつとします。もし、あのと正しくヘルメットを被っていなかったら、大きな事故の被害者になっていたかもしれません。雪道でも何度かスリップして転びそうになり、ヒヤリとしたことがありました。それまで事故はどこか他人事のように感じていましたが、僕自身が当事者となったことで、ヘルメットが命を守るための必需品であることを身をもって実感しています。また、ただ被るのではなく、正しく被ることが大切だと思いました。

今回、母からラジオの話を聞いて、交通事故について改めて考えるきっかけとなりました。交通事故は遠い昔、遠いところで起こっていた出来事ではありません。毎日のように自転車で乗っている僕にとつては、いつでも起こりうるものだと自覚しています。だから、これから僕は、自転車で乗るときは必ずヘルメットを被ります。雨や雪の日には早めに家を出たりライトをつけたりして、慎重に運転

しようと思います。ちょっとした油断が重大事故につながることを忘れずにいたいです。

もし、友達がヘルメットを被ることを面倒がるようなことがあれば、このラジオの話をしようと思います。相手がヘルメットのことを、命を守る大事な道具だと気が付けるように関わりたいです。そして、みんながヘルメットを正しく被ることで、交通事故のない明るい社会を作っていきたいです。

命はひとつしかありません。一度落としてしまうと、もう二度と戻ってくることはありません。自分の命に責任が持てるのは、自分だけだと思います。自分の命も、周りの人の命も平等に大切にできる人でありたいです。その一歩として、僕はこれからも交通ルールを守り、安全に運転していきます。



自転車にTSマークを貼いましょう！！

◇ TSマークには、保険が付いているので安心



**プロの手による
自転車の点検・整備が
受けられて安全！**

**TSマーク
付帯保険は所有者以外の
方も対象になります！
(家族・友人・従業員等)**

TSマーク付帯保険金の請求の流れ



事故が発生した場合、速やかに最寄りの警察署へ届けるとともに、必ず三井住友海上火災保険(株)事故受付センターへ連絡をして下さい。

0120-258-189

TSマーク付帯保険の補償内容	赤色 TS マーク	緑色 TS マーク
賠償責任保険 (被害者が死亡等した場合に、法律上の損害賠償責任を負った時の補償)	○死亡・重度後遺障害 (1～7級) 限度額 1億円	○死亡・障害 (すべての人身事故) 限度額 1億円 示談交渉サービス付き
傷害保険 (自転車利用者が死傷等した時の補償)	○入院 15 日以上 10 万円 ○死亡・重度後遺障害 (1～4 級) 100 万円	○入院 15 日以上 5 万円 ○死亡・重度後遺障害 (1～4 級) 50 万円
被害者見舞金 (被害者が入院した時の見舞金)	○入院 15 日以上 10 万円	○入院 15 日以上 賠償責任補償により対応

思いやり1.5m運動の実践を！



愛媛県では、「愛媛県自転車の安全な利用の促進に関する条例」の基本理念として、歩行者・自転車・自動車等がお互いを思いやり、安全・快適に道路を共有する「シェア・ザ・ロード」の精神の普及に努めており、ドライバーの皆様には、自転車を追い越すときの事故防止のため、「思いやり1.5m」運動の実践を呼びかけています。

ドライバーの皆様は、自転車の側方を通過するときは1.5m以上の安全な間隔を保つか、道路事情等から安全な間隔を保つことができないときは徐行していただきますようお願いいたします。

交通安全協会のご紹介

① 一般社団法人 愛媛県交通安全協会

松山市勝岡町1163-7 電話：089-979-2101

ホームページ：<https://www.ehime-ankyou.or.jp/>

② 各地区交通安全協会一覧表

協会名	所在地	電話番号
宇 摩	四国中央市三島中央5丁目4-20	0896-23-5331
新 居 浜	新居浜市久保田町3丁目9-8	0897-32-3260
西 条	西条市新田133-1	0897-55-9911
西 条 西	西条市周布349-1	0898-64-1661
今 治	今治市旭町1丁目4-2	0898-33-3466
伯方地区	今治市伯方町木浦甲4639-1	0897-72-2911
松 山 東	松山市勝山町2丁目13-2	089-941-7810
松 山 西	松山市須賀町5-36	089-951-1725
松 山 南	松山市北土居3丁目6-17	089-958-6558
久万高原	上浮穴郡久万高原町久万542-4	0892-21-0211
伊 予	伊予市下吾川960	089-982-7081
大 洲	大洲市東大洲1686-1	0893-25-0334
内 子	喜多郡内子町内子1432	0893-43-0116
八 幡 浜	八幡浜市広瀬2丁目1-5	0894-24-4895
西 予	西予市宇和町卯之町4丁目659	0894-62-9676
宇 和 島	宇和島市並松2丁目1-30	0895-23-0027
鬼 北	北宇和郡鬼北町大字芝225-1	0895-45-0277
南 宇 和	南宇和郡愛南町御荘平城2982-2	0895-70-1311



交通安全年間スローガン最優秀作

○ 子供の部門（小・中学生からの応募）過去十五年間の内閣総理大臣賞

平成	二十四年	いそいそでも かならずかくにん みぎひだり
同	二十五年	ヘルメット ぼくのだいじな おともだち
同	二十六年	につぽんを じまんしようよ 事故ゼロで
同	二十七年	ルールむし しん号むしは わるいむし
同	二十八年	しんごうが あおでもよくみる みぎひだり
同	二十九年	ペダルこぐ 免許はないけど ドライバー
同	三十年	自転車は 車といっしょ 左側
同	三十一年	とび出さない いったとまって みぎひだり
令和	二年	しっかりと 止まってかくにん 横だん歩道
同	三年	自転車に 乗るならきみも 運転手
同	四年	とうげこう よそみ おしゃべり きけんがいつぱい
同	五年	ぺだるこぐ ぼくのあいぼう へるめつと
同	六年	わたるまえ わすれずかくにん みぎひだり
同	七年	青だけど 自分の目で見て たしかめて
同	八年	車から ぼくたちみえない 手をあげよう

～ 愛媛県交通安全協会ホームページ 広告協賛事業所 ～

【四国中央市】

金生運輸(株)
大王製紙(株)

【新居浜市】

一宮運輸(株)
(株)大石工作所
桑原運輸(株)
住友化学(株) 愛媛工場
住友共同電力(株)
住友金属鉱山(株) 別子事業所
住友重機械工業(株)
愛媛製造所新居浜工場
宝運送(株)
東予信用金庫
日泉化学(株)
(株)三好鉄工所

【西条市】

(株)田窪工業所

【今治市】

(株)IJ C
今治造船(株)
今治ヤンマー(株)
愛媛県警備保障(株)
四国ガス(株)
四国通建(株)
四国陸運(株)
瀬戸内運輸(株)
BEMAC(株)
眞鍋造機(株)

【松山市】

あいおいニッセイ同和損害保険(株)
愛媛支店
アカマツ(株)
(株)アクセル松山
アサヒビール(株) 西四国支店
(株)アテックス
アトムグループ
(株)アベホンダ
Honda Cars 松山北

池田興業(株) 四国支店

(株)ISEKI M&D
(株)伊予銀行
NTT西日本 四国支店
(株)愛媛銀行
(株)愛媛CATV
(一社)愛媛県警備業協会
(一社)愛媛県指定自動車教習所協会
(一社)愛媛県自動車整備振興会
愛媛県二輪自動車協同組合
愛媛県遊技業協同組合
愛媛自動車販売協会
(株)愛媛新聞社
愛媛信用金庫
愛媛総合警備保障(株)
愛媛ダイハツ販売(株)
えひめ中央農業協同組合
愛媛トヨタ自動車(株)
愛媛トヨペット(株)
愛媛日産自動車(株)
オオノ開発(株)
(株)門屋組
(株)ガリレオコーポレーション
学校法人 河原学園
(株)かんぼ生命保険
(株)北四国警備保障
こくみん共済 coop
JA共済連 愛媛
JAバンクえひめ
四国電力(株)
四国名鉄運輸(株)
四国旅客鉄道(株)
JAF愛媛支部
(株)SHINWA
(株)スズキ自販松山
(株)セキュリティエヒメ
(一社)全国道路標識・標示業
四国協会 愛媛県支部
全国農業協同組合連合会
愛媛県本部
(有)大豊陸送
(株)たいよう共済 愛媛支店
太陽石油(株) 四国事業所
(株)タカラレーベン
帝人(株) 松山事業所

(株)テレビ愛媛

東京セフティ(株)
トヨタ L&F西四国(株)
(株)トヨタレンタリース西四国
(株)TRUST LINK
日本郵便(株) 四国支社
フェイス・ソリューション・
テクノロジーズ(株)
(株)フジ
(株)フジセキュリティ
(株)フードサポート四国
ヨシケイえひめ

三浦工業(株)

(株)村上モータース
(株)四電工 愛媛支店

【伊予市】

旭警備保障(株)
マルトモ(株)

【伊予郡松前町】

東レ(株) 愛媛工場
日章(有)

【東温市】

KOKUDO(株)
(株)ヒカリ

【伊予郡砥部町】

医療法人 誠志会 砥部病院

【大洲市】

(株)一宮工務店

【八幡浜市】

(株)サンリード
八水蒲鉾(株)
堀田建設(株)

【宇和島市】

宇和島自動車(株)
宇和島信用金庫

令和7年12月1日現在 100事業所



交通安全活動を支援しています。
一般社団法人
愛媛県交通安全協会
Ehime Traffic Safety Association

〒799-2661 愛媛県松山市勝岡町1163-7

TEL: 089-979-2101